パレスチナ赤新月社医療支援事業（ガザ）

看護係長 川瀬 佐知子

派遣期間：2023 年 7 月 3 日～11 月 5 日

派遣地：パレスチナ自治区・ガザ地区

日本赤十字社は 2019 年からパレスチナ自治区・ガザ地区にあるアルクッズ病院で医療支援事業を行っています。活動開始当初は日赤職員を現地に派遣していましたが、COVID19 の流行や情勢悪化の影響で 2020 年からリモート支援に切り替えて支援を続けてきました。2023 年 7 月にガザ地区への派遣が再開し、ずっと心待ちにしていた現地スタッフとの対面が実現しましたが、約 3 か月後の 10 月 7 日、イスラエルとの軍事衝突により事業は中断をやむなくされました。現地での活動及び衝突以降のガザの状況について報告します。

ガザ地区は隣国との境界を高さ 6 m にも及ぶ壁で囲まれています。「天井のない監獄」とも呼ばれ、出入りするには厳しい検問を受けなければならず、パスポートを持つことすら許されない人々もたくさんいます。食料、水、電気などの生活インフラへの制限はもとより、教育の機会も極端に制限されています。そのため、当事業では「医療サービスの質の向上」を目的とし、現地の医療スタッフの育成を主体とした活動を行ってきました。現地スタッフや看護師長たちと協力し、全看護師約 80 名を対象に手術前後のケアや点滴の管理など、看護技術に関する手順書を作成し、研修を行ってきました。活動の要となるのは、看護部長と 2 名の現地看護師（ハムディ、ハッサン）です。看護部長はとても熱心な方で、雇用が不安定かつ教育の機会が乏しい現状に常に懸念を抱いていました。私は毎日彼の部屋を訪問し、スパイスの利いたコーヒーを飲みながら、継続教育の方法について語り合っていました。ハムディは 20 年以上新生児看護の経験があり、とても頼りになります。人付き合いがとてもうまく、様々なネットワークを駆使して、事業を支えてくれています。ハッサンは 20 代とまだ若いですが、頭の回転が速くてエネルギッシュな救急看護師です。8 月、9 月と続けて看護ケアの研修を開催し、10 月 17 日には実務訓練に向けたトレーニングを予定しており、全員でその準備に取り掛かっていました。

右端がハムディ、右から 2 番目がハッサン	研修の様子

しかし、10 月 7 日の軍事衝突で状況は一変しました。建物や道路は損壊し、街中のいたるところに煙が上がり、焼けた匂いが充満していました。よく通ったパン屋は全壊し、子供たちで賑わっていた道は瓦礫の山と化していました。病院には爆撃のたびに患者が運ばれ、看護師は 24 時間交代の緊急体制に切り替え、看護部長は何日も泊まり込みで対応にあたっていました。日に日に攻撃が激化し、病院の天井が落ち、ガラスが割れ、看護部長からは「身の危険を感じながら医療スタッフは働いている。医療現場はほんとに過酷だ。」と連絡がありました。アルクッズ病院自体も何度も攻撃勧告を受け、退避を強いられていました。その後、水・燃料が底を尽き、11 月 14 日に患者、スタッフ、避難民共に南部に移動しました。

負傷した救急隊員の対応にあたる	多数の避難民が病院に避難

軍事衝突が勃発した際、私はガザ市の宿舎に滞在していました。日に日に状況は悪化し、10 月 13 日に赤十字国際委員会のメンバーと共に、南部に退避となりました。その後もアルクッズ病院のスタッフと連絡を取り続け状況把握に努めるとともに、同じように南部に退避してきた避難民やスタッフの健康状態の管理を行っていました。衝突により受けた傷の処置、高血圧や糖尿病など持病をもつ人の薬の手配や妊産婦さんの健康チェック、精神的なストレスによりパニック発作を起こした若い女性への対応なども行いました。その後、11 月 5 日に日本に帰国しました。

衝突から 3 か月が経過し、イスラエル、ガザ双方で、死者は既に 20,000 人を超えました。その多くは、女性や子どもを含む一般市民です。攻撃や燃料不足により多くの病院は機能を失いました。救急車も攻撃され、救急隊員も殉職されています。国際人道法で守られるべき沢山の命や機能が失われ続けています。

パレスチナ赤新月社のスタッフ、ボランティアを始め、赤十字のメンバーは現在も活動を続けています。大阪赤十字病院でも人道危機の収束を願い、We are not a target（医療はターゲットではない）キャンペーンを行い、現地の方々の力となれるよう、今できることに全力で取り組んでいます。このかつてない人道危機による身体的、精神的被害は甚大で、事態が収束したあとも、長期的な支援が必要です。今後も皆さまのご支援よろしくお願いします。

人道危機の収束を願って実施している Not a target キャンペーン

キャンドルキャンペーン